残虐で優しい聖女

オミズ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あるところに少女がいました。

その少女は髪も肌も心も、この世の醜さを一切受け付けないような【白】でした。

醜さを知らぬが故に、染まりやすく穢れやすい。

これはそんな少女の成長の物語。

これは改定前のものとなります。おそらくもう更新しません。

目次

プロローグ ―― 1
第一話　少女の疑問 ―― 8
第二話　少女の探し物 ―― 17
第三話　少女と少年 ―― 24
第四話　少女と運命 ―― 33
第五話　少女と運命の怒り ―― 39
第六話　少女と嫌いの恐怖 ―― 45
第七話　少女と村の秘密 ―― 55
第八話　少女と養母のふれあい ―― 65
第九話　少女と教育 ―― 72
第十話　少女と感情 ―― 78
第十一話　少女と空気 ―― 86
第十二話　分岐点Ⅰ ―― 95
第十三話　少女と逆行 ―― 106

プロローグ

あるところに少女がいました。
その少女は髪も肌も心も、この世の醜さを一切受け付けないような【白】でした。
少女の名はイリ・ラ・ヒール。
醜さを知らぬが故に、染まりやすい少女。
これは彼女の物語。

イリが住んでいる村は王国の片隅にある農村。
住民は２０人弱。その内半分を２０代から３０代の若者が占めている。
村の四方は森に囲まれていて、外界の干渉を否定している。
気候は温暖。一年を通して、凍えるほどの寒さにはならない。

土地は肥えており、採れた作物は村の若者たちが外に売りに出かける。
この村の生活は驚くほど平和で、日々の生活の心配はない。
だが、全ての人が同じように、豊かな生活をおくっているわけではないことを知っている。
例えば隣国の魔獣国。
魔獣国の平民の生活は苦しいらしく、餓死する平民の数が年々上昇しているのだとか。
そのことを知ってからイリは思っていた。
（何で世界は平等じゃないんでしょうか？）
イリは孤児だ。
だが、幸せだ。
家族のように温かく接してくれる、養父と養母に村の皆がいるから。
それに対し、魔獣国の平民たちは家族がいるのに、何故幸せになれないのだろう？
その疑問は、毎日考えているのに霧中の森のように答えの出口が見えない。
それなのに、今日もイリは疑問を浮かべる。
（何でこの世界は平等じゃないんでしょうか？）
（何で私は幸福なのに、魔獣国の平民のみなさんは幸福ではないんでしょうか？）

考えるのは失礼だと思いつつ、考える事をやめない脳は、毎日のようにその先も考えてしまう。
（私が幸福じゃなかったら…魔獣国の平民のみなさんは幸福になるんでしょうか？）
（なら――）
「あ～！やめです！」
そう叫ぶ事で、思考を無理矢理断つ。
その行為にも慣れを感じてしまっている。
だが、やらざるを得ない。
そうしないと更に、いけない事を考えてしまいそうだったから…

「イリ。こっちにきてくれないかね」
その翌日、イリが自室で本を読んでいると養母に呼ばれた。

「分かりました」
おばさまが私を呼ぶのは珍しいですね、などと思ったが淀みなく返事をする。
返事を遅らせると、養母が不安になることがわかっているからだ。
部屋を出る際に、何となく部屋を一瞥する。
必要最低限の家具類と、申し訳程度にある本棚。
そんな、中身の無いような部屋に物悲しさを覚える。
こうなったのは、イリが養母と養父に養われる事になって、部屋を貰ったときに望んだ事だ。
（私には必要最低限のお金しかかけないで下さい）
それであの頃は良いと思っていた。
むしろそうすべきだという確信があった。
幼いなりに、家計のことを考えたからだ。
だけど、今は少しそう言ったのを後悔している。
今年で１２歳になるイリは、オシャレというものに少し憧れている。
だが、イリの持っている服といえば、２着の白い簡素なワンピースのみだ。
それは少し寂しい事のように思えたが、捉えどころの無い幻のように想いは消える。
「イリ…まだかい？」

イリを呼ぶ不安そうな声に、はっとなる。
「今、行きます！」
身を翻して部屋から目を逸らした。
いつも見ているのに、今はこれ以上見たくなかった。

デッカイ。
養母のもとに行って、イリが最初に思ったのがこれだ。
正確に言うと、養母の隣にいた男に思った。
筋肉質で、高身長で、髭がもっさり生えていて、村では見たことのない、まるで熊さんみたいな男の人だと。
その熊さんは、イリを見ると二カッと笑って自己紹介をしてくれた。
「俺は、【メンバー】のバスターだ。偽名だが気にすんな」
「私はイリ・ラ・ヒールです。バスターさん、よろしくおねがいします」
偽名ですか、などと思いつつイリも自己紹介をすると、熊さん改め、バスターは困った顔をして養母に耳打ちした。

「お前さんの娘さんは、警戒の字すらしらねえのか？素直なのはいいが…このままじゃ騙されるのがオチだぞ」
イリの常人より優れた耳は、その内容を一字一句違えずに聞き取る。
イリの身体能力が常人を遥かに凌いでいる事を、養母は気付いてはいないだろう。
この家に貰われたときから、過去に誰かに言われた気がするので隠しているから。
「…ああ分かってるよ。イリは今の世の中には似合わないくらい優しいってことは。…だから、アンタを呼んだんだよ」
会話の意味する所は分からなかったが、イリの為を思っての行為だという事は分かった。
それを確認できたら、いつも通りの笑みと態度を保てる。
そう思うこと自体が不信感を感じている証拠なのだが、イリは気付かないフリをする。
（気付いたら破綻してしまうから…）
気持ちを切り替えて養母とバスターを交互に見る。
そして、不審に思われないうちに養母に声をかける。
「おばさま、何を話していらっしゃるんですか？」
「……世間話さ。待たせて悪かったね」

これから何を話すのかは分からないが、あまり良い内容ではないことを察したイリは黙る事にした。
その直感は正しかった。
この出来事がきっかけで、イリの人生はトクベツなモノになる。

これが、後に『残虐で優しい聖女』と呼ばれることになる、イリ・ラ・ヒールの始まり。
彼女はこれから何を為して『残虐で優しい聖女』と呼ばれることになるのかを追っていく。
これはそんな話。

第一話　少女の疑問

「イリ。お前は今日から俺の仕事に着いて来てもらう」
「ふぇっ!?」
バスターからいきなり飛び出した言葉に衝撃が隠せず、素っ頓狂な声を上げたイリ。
今まで、〇〇さんの仕事に着いて行きたいです、と訴えても、皆が申し訳なさそうに断られていたからだ。
いったいどういう風の吹き回しかと思い、養母を見るが、考え事をしていてイリに気付かない。
諦めて、知識も経験も足りない脳をフル回転させて理由を探す。
（えっと。バスターさんは…）
そこまで考えてから、イリは気付いた。
そもそも、バスターが何をする人なのかを知らない事に。
「…まあ、驚くのも無理はないか。だが、これはそこのオババに頼まれたことだ。このオババは、お前さんに危険に対処する術をいい加減知っといて欲しいのさ」

「……バスター、私の事はオババじゃなくて、お姉さまとお呼び」
「オババで充分だろ。っと、話が逸れたな。それで、質問はあるか？」
養母が、養父以外の誰かとこんなに親しそうに話すのは初めて見た。
その事に少し驚きつつ、質問したいことを探す。
一瞬で一つ質問したいことがあったことを思い出す。
「…バスターさんのお仕事って何ですか？」

質問をしながらもイリは予想を立てる。
あたったら嬉しいな、と思いつつ。
（熊さんみたいな人ですから、樵とか、でしょうか？）
「…あー、いいかイリ？これから話すことを真正面から、目を逸らさずに受け入れろ。いや、受け入れてくれ」
先程までの快活な感じから一転して、気が進まなそうにバスターは言葉を紡ぐ。
その様子は、養母の【世間話】から感じたものと同じ、嫌な予感をイリの脳裏に掠めさせる。
知らず、イリは腹に力を込めてしまっていた。

（ただ、バスターさんのお仕事を聞くだけなのに……どうして悪寒が止まらないんでしょう？）

妙に引き伸ばされた時間の中、やっとバスターが口を開いた。

「俺の仕事は…村の周辺に生息しているモンスターを……殺す事だ」

「えっ？」

（何を言っているのですか？）

（殺すって…私達と同じ、生きてるモノを？）

（それは…必要な事？）

知識としては知っていた。

モンスターと呼ばれる生物がいること。

モンスターは大概人に危害を加える事。

危害を加えたモンスター。或いは危害を加える恐れのあるモンスターが……殺されること。

いや、最後のは知ろうとはしなかった。

無意識の内に、眼を背けていた。

見たくなかったのだ。

自分が生を謳歌している背景に、暗いモノがあることを。

（…反吐が出ます）
（殺すという行為と……眼を背けていた私自身に）
イリの心情を見透かしているはずなのに、バスターは更にイリを抉る。
「お前が今まで平和に過ごせたのは、モンスターを俺達【メンバー】が殺していたからだ」
「あっ…」
突きつけられてしまった。
これで…もう疑問から逃げることは出来ない。
「イリー どこへ行くんだい！」
気が付いたら、家を飛び出していた。
養母の制止の声も振り切って、ただ地を駆ける。
「イリ、急いでどうしたんだ？」
農家のフォースさんが言う。
「イリ、かけっこでもしてるの？」
最近、結婚したばかりのポーラさんが言う。
「イリ、お前は元気だねぇ」
村一番のお年寄りのテンさんが言う。
「イリ、そっちは森だよ」

お節介焼きのプローショさんが言う。

その言葉を聞くたびに、イリの心は張り裂けそうになる。

彼らが生きていられるのは、モンスターを殺してきたからだ。

（私は恵まれています）

（優しい皆様に囲まれて、おいしいご飯を食べて、退屈な日常を楽しんで）

（でも、だからこそ、確かめなければいけません）

モンスターがいるから絶対に行ってはいけない、と言われていた森に足を踏み入れる。

今は、疑問を確かめるためには、自分の命すらどうでもいいと思う。

（モンスターがそんなに危険なのか）

（モンスターと共存する事はできないのか）

乱雑に地を蹴りながらも思考は加速する。

（そもそも、モンスターというのはどういう生物なのか）

そして、出会った。

体長はイリの3倍近く、爪は容易にイリを死に至らしめれるほど、鋭くて硬い。

瞳は爛々と殺意に輝いている。

バスターを【熊さん】だとするのならば、イリの目の前にいるモンスターは【熊】であった。
そんなモンスターが、ちっぽけな少女に殺意を向けた。
「ちょっとお話を!」
あらん限りの声を張り上げて呼びかけてみるも、話を聞いてくれる気配も無く、モンスターは無造作に腕を振る。
やむを得ず、仕切りなおす為に後ろへ跳んだ。
全力で後ろに跳んだはずなのに、その爪が肩に引っ掛かって横に飛ばされる。
数メートル宙を飛んでから、木にぶつかる。
「あ?…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
初めて経験する痛みに、耐え切れるはずも無く絶叫を上げる。
自分の体がどうなっているかすら分からない。
ただ分かるのは、自分の命の海がどんどん干上がっていっていることだけ。
(痛い痛い痛い痛い痛い!)
(怖い怖い怖い怖い怖い!)
痛みと恐怖の板ばさみで、気が触れてしまいそうになる。
むしろ、そうなりたいくらいに感情が溢れてくる。

そうすればこの苦しさから解放されるのに、イリの脳みそはそれを許してくれない。
イリが初めて抱いた感情に気を取られている間に、モンスターはイリの眼前に来て見下ろしていた。
「…ころさ…ないで、ください」
心は簡単に折れた。
出来るのは敗者らしく命乞いをすること。
先程までの、命を捨ててもいいと思える【熱】は無くなっていた。
だが、命乞いできる相手ではなかった。
それを知るべきだった。
そんな少女が迎える結末は簡単。
何の感慨も抱かずに、本能に任せてモンスターは腕を振る。

その寸前、高速で【影】が割り込んだ。

「イリッ!!無事か!?」
「あ…バスター…さん」
モンスターの腕を、大きな剣で受け止めながら、バスターはイリの安否を確認する。

その姿は、とても頼もしくて涙が出そうになる。
でも、バスターが来たという事は、どちらかが死ぬ運命にあるという事。
そこに気付いて、心が、体と平行して熱を失っていく。
「チッ。怪我してるのか！待ってろ。今、片付ける！」
イリの心情も知らずにバスターは必死な顔でモンスターを見る。
（何であなたはそんなに必死なんですか？）
（今の私は、あなたとモンスターの命が同等だと思っているのに）
イリの冷え切った思考と反対に、生存競争は激しく火花を散らしていた。
二、三度モンスターの腕と打ち合ったバスターは、身を守るための剣を、投げた。
「えっ？」
痛みも思考していた事も忘れて、思わず戸惑いを口にする。
それほど、彼の行動は理解し難かった。
受け止める剣がなくなった事で、勢いよく振り下ろされた腕は、彼を捉えることは無かった。
…気が付いたら、彼はモンスターの頭上で、捨てたはずの剣を振り下ろしていたからだ。
そして、

グギャアアアアアア!!と、甲高い悲鳴を上げて、モンスターは地に伏せた。
漏れ出した鮮血の量が、致命傷だということを理解させる。
「すごい…」
思わず漏れた感嘆の声。
それに気付き、酷く自己嫌悪する。
つまり、自分はモンスターに殺されかけたことで、人間の方へ天秤が傾いてしまっているのだ。
先程まで、人とモンスターの命を同じものとして見ていたはずなのに…
(私がこの森に入ったことで、このモンスターは死んだのに、そのモンスターを殺した技術に感嘆するなんて…)
(意識が朦朧として吐き気がする)
そこまで考えて、唐突に思い出して苦笑する。
(…そういえば、私、肩を切り裂かれていたね)
少女は地に伏せた。

第二話　少女の探し物

慣れ親しんだ天井が見える。
それだけを確認して彼女は、何故見えるのかを考えることなく目を閉じた。
「イリッ！寝なおすな！」
目を閉じた矢先の怒声に、イリは億劫そうに目を開く。
そしてトローンとした目で不機嫌そうに、怒声を上げた人物を見る。
「…なんふぇすか？いまねむいんれふ。くまひゃんはとうみんのじゅんひてもしててくらはい（何ですか？今眠いんです。熊さんは冬眠の準備でもしてて下さい）」
イリの一言は、養母とバスターを固まらせるには十分だった。
場の空気を完全に乱した少女は、今にも寝そうなくらいトローンとした目付きをしている。
フラフラと、頭を揺らすたびに枝毛がピョコピョコはねる。
寝起きで頭が回っていないのか、肩に巻かれた包帯に気付いていない。
そんなイリを見かねた養母は、額を押さえて溜め息を吐いてからイリを起こした。
「イリ！起きな！」

「は、はい！起きました！寝てなどいません！」
養母という、家主兼家族の命令には敏感なイリは、目を、くわっ！と見開いて返事を返した。
その反応速度は、野生の動物並であった。
そして、直ぐに後悔した。
イリを見る二人の目が据わっているのである。
「な、何ですか？確かに寝ぼけていたのは悪かったですが、それ以上の事は無かったと思うんですけど…」
たじろきながら言葉を紡ぐイリを、責める様な眼差しで見つめる二人。
どうやら相当に不味い事をやらかしたようだ、と判断したイリは思い出したいようで思い出したくない気分に襲われる。
だが、思い出さないと後が怖いと思い、素直に思い出そうとする。
（昨日…バスターさん…モンスター…!!）
「あ…そういえば、私、森の方に行っちゃたんですね。そして、モンスターに肩を…」
思い出した瞬間、にぶい痛みが胸の中を襲う。
自分はあのモンスターが死ぬことで助かったのだ…
その事が唾棄すべきであるものだと、心が訴えかける。

「いっ。…あはは。…自業自得ですね。村の皆様に入っていけないと言われた所に入ったんですから」
肩から痛みが走ったおかげで、心の訴えから一時気が逸れた。
だが、その事を嬉しく思う自分を軽蔑したせいで、結局は心の訴えが酷くなっただけだった。
「イリ。アンタは確かにアタシらが禁じていた場所に踏み入った。けどね……アタシらは知っていたさ。いつかはこうなるって」
全てに疲れ果てたかのような枯れた顔で、養母は呟くように話す。
その様子に戸惑いを覚えつつ、疑問を口にする。
「それは、私がモンスターのいる場所に行く事が分かりきっていた…という事ですか？」
半ば冗談みたいな疑問だったが、返答はまさかの肯定だった。
「…そうだよ、イリ。まさか、私らが引き金を引くことになるとは思わなかったけどね」
疑問は増えていくばかりで、確信には触れることさえ出来ない。
養母は、あえてそういう風に話しているのだろうとは見当は付く。
それがもの凄くもどかしい。
自分がそんなに信用ならないのか？
そんな暴風の様な感情が脳を埋め尽くす。

だけど、だからこそ、あえて触れない。
確信に触れたい気持ちは強い。
だが、イリの優先順位は基本的には自分の事より家族の方が高い。
故に、家族が話さないと言うのなら、それにイリは従う。
盲目的だろうが何だろうが、これがイリの生き方。
昔、家族に従わなかった事で後悔したような気がしたから…
だから、作り物の笑顔と共にこの空気を壊す一言を宣言する。
「おばさま。バスターさん。お腹、空きました。何か食べたいです」
はあ。
と、盛大に溜め息を吐く二人。
そんな幸せな日常が戻ってきたように思えて、少しだけ心から笑えた気がした。
「分かった分かった。飯にしようぜ」
「イリ、食事を終えたら説教だからね」
これでいい。
そう思ったが、どこか、そんな関係は寂しいとも思いながら返事をする。
「……はい！」

心の声に向き合う覚悟は出来ない。
心の声に耳は貸せない。
だからやめてよ…

お前がコロシタおお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタ前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタお前がコロシタ

そんなに叫ぶのは…

怖いよ。

でもね…誰にも話せない。

モンスターが死んだことにショックを受けているなんて。

話したら、悪い事だって言われる。

オカシイって言われる。

ねえ…なんで？

なんであなたたちが正しくて、わたしが悪なの？

生き物の【死】を悼むことはイケナイことなの？

私には分からない。

ずっとずっと蓋をして、考えないようにしていたけど…これからはキチンと考えないといけない。

それが…私に出来る唯一の追悼。
名も知らない生き物への――――

第三話　少女と少年

［ｐａｒｔ：イリ］

私は醜い。

そう思ったのはいつ頃でしたか。

確か、一年くらい前の夏の出来事から…

私は村の夏祭りに出掛けました。

この村には、私と同じ年の瀬の子供はいなくてさみしかったことを覚えています。

今もさみしいことに変わりはないのですが、昔ほどさみしく思わなくなりました。

これもきっと、あの出来事があったからでしょう。

村唯一の子供である私は、当然、と言うのは傲慢ですかね。

まあ、皆に可愛がられていました。

それ自体は嫌ではなかったのです。

だけど、思っていたのです。

もし、私の他に子供がいたら、村の皆は、その子の方を可愛がるのではないか…と。

それ自体は、浮かんでは沈むような、小さな小さな恐怖でした。

実際、私はそんな事は思い出さずに夏祭りを楽しんでいました。
だからでしょうか。
私は、その日、村の秘密の一端を掴みました。
［ｐａｒｔ：イリ：ｅｎｄ］

「あ！…はぁ、はぁ、はぁっ!!」
酷い目覚めだ。
素直にイリはそう思った。
あまりにも酷い目覚めだったので、悪夢の続きかと身構えたが、見慣れた木目の天井が見えると、安心して力を抜いた。
今でも嘘ではないかと否定したい…夢。
その冒頭。

右手を宙に伸ばして、何かを掴むように握る。
何も掴めていない右手を、じっと見つめて呟く。
「最悪です…ね」
それは、誰に、何に、向けた言葉なのかは、イリ自身も理解できていない。
言うなれば自分自身なのだが、それもどうもしっくりこない。
もやもやとして気持ちを抱えたままだが、どうも気になることがある。
この気持ち悪い感覚である。
現状の整理をしてみる。
悪夢を見たせいで体中汗でグッショリ。
そのせいで、ベットのシーツもグッショリ。
極めつけに、汗の臭いが充満して、中々に人様を入れられない部屋になっている。
「うへぇ。…どこから手を付けましょうか？」
とりあえず、換気する為にドアを開けようとして、ふと考えた。
（ドアを開けたら、この臭いが家中に充満…）
非常に迷惑をかける事になる。
それに、恥ずかしい、とも思う。
数分間唸った後、思い付いた様に手の平を叩く。

「そういえば窓、ありましたね」

綺麗さっぱり【窓】という存在を忘れていたイリは、奇跡的に気付くことが出来たらしい。

自分の汗の臭いに、顔をしかめつつ、窓を開ける。

瞬間、心地良い風が体に当たる。

「はあ～。風が気持ち良いですねぇ～」

この場に留まっていたい誘惑に駆られるが、この惨状をどうにかしないと落ち着くことも出来ない。

数秒考えてから、しぶしぶと動き始める。

シーツを摘まんで、窓枠に掛ける。

住人に気付かれずに洗うのは難しいから、お日様が汗の臭いだけでも消してくれることを祈る。

窓って便利だな～、などと思いつつ、着替えと体を拭く物を持って、窓から飛び出だした。

家の、所々ある出っ張りに、器用に乗りながら降りていくイリ。

何故か重心が傾いているが、現状を打開することだけを考えているイリは、その理由を考えずに降り続ける。

そんな彼女を咎める者など、今この場にはいない。
「あっ。靴、忘れました。……まあいいです」
そうして、悠々と地面に降り立った少女の、最初の一言は、これだった。

時間が無いのか、急いで痛い目にあったばかりの森に向かっていくイリ。
人目が無いからか、全力で走っていく。
（痛い目にあったばかりなのに馬鹿ですね）
そう思い、苦笑いをしながらも、淀みなく足は地面を蹴る。
死んでしまったモンスターに会った場所で、一度立ち止まって黙祷する。
―お前がコロシタ―
その怨嗟。
その無念。
自分が創り出している幻聴だと分かっているのに、イリは傷つく。

その事が不思議で、何故か笑えてくる。
「…行きますか！」
空元気と共に、イリは走る。
目的地は直ぐそこだ。

目の前に広がるのは、光を反射して輝いている湖。
辺りを見渡せば、小鳥は木々の枝で体を休め、馬は【光】を飲んでいる様子が見える。
耳を澄ませば、ざあぁぁぁぁぁ、と絶え間なく流れる滝の音が聞こえる。
それらが合わさり、まるで異世界みたいな空気を醸し出している。
「綺麗ですね…」
そう呟きつつ、服を脱ぐ。
そう、ここに来たのは体を洗う為である。ついでに服も。
だが、イリは忘れていた。

自分が肩に怪我をしているということを。
結果、どうなるかと言うと。
「イタッ!!凄く痛いです!!」
そう言って、水飛沫を上げながらゴロゴロ転がるイリ。
それが、痛みを加速させている事にも気付かずに、転がり続ける。
何故イリが、こんな馬鹿みたい（実際に馬鹿そのものだが）な行為を、モンスターが住んでいる森の中で出来るのかというと、ここが、【安全地帯】と呼ばれる場所だからである。
【安全地帯】とは、この世界の至る所にある、モンスターが入り込まない領域の事を指す。
例えば、イリが住んでいる村や、この世界の王都など、人が住んでいる所は概ね【安全地帯】である。
尤も、この場合【安全地帯】があるから、人が集まったと言う方が正しいだろう。
次に、【安全地帯】の見分け方についてだが、これは簡単である。
入れば空気で分かる。
そういうものなのである。
何故イリが知っているのかと言うと、あのモンスターと会った日、バスターが重症を負ったイリをここに連れてきたからだ。

生憎、意識は混濁していたが、【安全地帯】の空気は感じた。
だから、直ぐ近くにあるのだと検討を付けてここに来たのである。
ようやく転がるのが悪手だと気付いたのか、痛みを堪えながら立ち上がるイリ。
そして気付く。
何者かがこちらを見ていることに。
「あの～。何か御用ですか？うるさくしたのを叱りに来たんですか？それについてはすみません。謝ります」
先手必勝。
イリは相手の出鼻を挫く作戦に出た。
何回も大人に叱られている内に、相手が叱る前に謝れば、相手は戸惑うという事を知った。
実際、これを覚えてからは有耶無耶になることが増えた。
何者かは、ずっと黙っている。
ここまで相手が黙るのは初めてだと思い、怒られないか警戒しつつ近寄ってみる。
近寄った先にいたのは、イリと同じくらいの年の瀬の男の子だった。
「あの～。聞こえていますか～？」
声を掛けながら、イリは無遠慮に、男の子の体を隅から隅まで見る。

黒い肌に黒い髪。
俯いているせいで顔立ちは分からないが、額に布を巻いている。何故だろうか？
だが、イリの目から見ても引き締まっている体をしている。
身長はイリの方が少し大きい。
何だか勝ったような気がして、少し嬉しくなる。
同じくらいの年の子供なんてものを見たせいか、妙に嬉しくて興奮している。
こうなると、顔まで見たくなるもので、少し逡巡してから男の子に更に近づく。
「あのっ。お顔、見せてくれませんか！」
そう言って、手を取ってみるイリ。
それに驚いたのか、男の子は遂に喋った。
「テメエに羞恥心はねえのかっ！」
「はい？」
記念すべき一言目は罵声だった。

第四話　少女と運命

［ｐａｒｔ：???］

一目見た瞬間思った。

俺は、コイツを好きになれない。

可愛い、とは思った。

穢れを知らない綺麗な顔に、何者にも染まっていない白い髪。

打算の一つもない心地良い声。

大体の奴らなら、一目見た瞬間に好きになるだろう、とは思う。

だが、俺にとってはその姿は毒にしか見えなかった。

穢れを知らない綺麗な顔？

（そんなに俺は愛されなかった）

何者にも染まっていない白い髪？

（それは、『個』というものが無いだけじゃないのか）

打算の一つもない心地良い声？

（皆が隠し事をしている箱庭の中で育っただけだろう）

まあ、そんな訳でイリの第一印象は最悪だった。
だが、直ぐに理解した。
コイツは人一倍自分に縛られている、って。
［ｐａｒｔ：???：ｅｎｄ］

羞恥心？
イリは純粋に疑問に思った。
何を恥ずかしがる事があるのか、と。
だから、問い返す。
「あなたは、何が恥ずかしいんですか？」
「はぁ？」
「…伝わりませんでしたか？もう一度言います。あなたは、何が恥ずかしいんですか？」
イリの問い掛けに、少年は気味の悪そうな顔をして、返答した。

「何がって。テメエは裸を見せて恥ずかしくねえのか？」
何を訊いているのだ？という顔をしてイリは返答する。
「ええ。恥ずかしがる道理はないです」
「…成る程。テメエの年は？」
「１２ですけど…」
「ふーん」
そう呟いて、少年は思考に没頭してしまった。
どうやらイリの事より、気になることができたらしい。
手持ち無沙汰になったイリは、体を洗うという目的は達成できたので、体を拭いて服を着る。
その際、肩の怪我に細心の注意を払う事は忘れない。
注意を払わなかった結果が、先程の痛みだということを学んだ。
ワンピースしか服を持っていないのは悲しいと思っていたが、ワンピースは肩の怪我には優しい服だということに気付き、複雑な気持ちになる。
その際、何か気になることが出来たような気がした。
「うーん？何か忘れているような気がします…？」
首を捻って数秒考えるが、何も思い出せないので諦める。

思い出せないならたいしたことの無い事なのだろう、と結論付けたイリは、目下最大の興味の対象である少年を見つめる。
どうやら、家を抜け出したことは忘れているようだ。
先程は上半身しか見ていなかったので、次は下半身を見ようと思ったので、目線を下げていく。
頭、首、胸、腹、と順調に目線を下げていたが、足の間までいったところで驚愕に晒される。
「な、なんか、ついてますっー――――!!!」
「テ、テメエ!!見やがったな!!死ね!!」
イリが叫んだ瞬間、少年は顔を一瞬で赤くさせて、その勢いでイリの意識を刈り取った。

あの後、気絶させたイリを振り回しながら、彼はイリの住んでいる村にやってきた。

途中で木の幹にぶつけたが、いい気味だと思うので気にしない。
何故か村は閑散としていて、人一人住んでいなそうな様相を醸し出していた。
「おい。誰かコイツをちゃんと管理しろ」
少年の苦情に反応して、誰もいなかったはずの村に、人が何人も現れる。
その中の一人が、緊張した面持ちで一歩踏み出す。
「まだ、約束の時は早いと思いますが、如何様ですか？」
その人物は、イリがおばさまと呼んでいる女性であった。
その言葉に嘲笑して、彼は返答する。
「ボケたか？コイツは世界を知っちまっただろ」
イリを振り回しながら返事をしている所為か、気絶しているイリの顔が苦しそうになっている。
少年はそれに気付いていないフリをしつつ、振り回し続ける。
「…それは……そうですが…」
辛そうに顔を歪めながら、肯定するしか出来ない女性はそう言った後、押し黙った。
とりあえず、回されているイリは放っておかれる定めにあるらしい。
彼は、それが当然だと言わんばかりに、表情を浮かべずに言った。
「幸せな箱庭生活は終わりだ。これからは…コイツ次第だ」

そして、イリをぶん投げた。
ズシャアアアアアア!!と痛そうな音を上げながら転がったイリは、当然の如く目を覚ました。
「ひぎゃあぁぁぁぁぁぁ!!イタッ!滅茶苦茶に痛いですー――――!!!」
痛みに慣れていない少女は、周りの空気を読む余裕も無く、悲鳴を上げる。
それも当然なことだろう。
目が覚めたら痛みが襲い掛かってくるなど、考えたこともないだろうから。
「うっせえ」
彼は、そんなイリに容赦無く追撃を仕掛ける。
具体的に言うと、顔を踏んだ。
「ぶぎゅっ。…って、何するんですか!!」
顔を踏まれて憤慨しているイリを、冷ややかな目で見つつ彼は告げた。
「一週間…一週間だけ猶予はやる。だから、お前なりに【ここ】と別れを告げる覚悟を決めとけ」
「え…?」
イリの破滅への道を――――

第五話　少女と運命の怒り

「…何故ですか？」

少年の放った、【ここ】と別れる覚悟を決めとけ、という言葉。

その言葉が唐突過ぎてイリの思考は追いついていないが、今は否定して考える時間を延ばさないとマズイという直感が働いていた。

故に、駆け引きなどしたこともない頭で、時間を引き延ばす算段を立てる。

「……何故かって…分からないのか？」

イリの思惑を理解しているのか理解していないのか、少年は妙にゆっくりと話す。

その様子に警戒心が湧き上がる。

焦りを感じながらも、慎重に言葉を吟味して会話を重ねる。

「…ええ、分かりません。そもそも、会ったばかりのあなたに指図を受ける覚えもありません」

慣れない敵意を少年に向けながらも、イリは脳を酷使して二つの事を考える。

一つは、少年との会話の言葉。

どの言葉を選べば会話を長引かせることが出来るか、どの言葉を選べば少年の言葉を

否定することが出来るか。
もう一つは、何故少年が【ここ】と別れる覚悟を決めとけ、などと言ってくるのか。
会話の中で情報を引き出して、バラバラのピースをつなぎ合わせることが出来るか。
「へえ、分かんねえのか。思った以上に温室育ちだな。まあ、いずれは知ることだしな。教えてやるから、足りない脳みそよ～く使って聞けよ」
ヘラヘラと笑う少年の声色に暗い色があることが気になったが、それを気にしていると最優先事項が疎かになるので、バッサリ思考から切り捨てる。
今が正念場だ。
ここで可能な限り情報を集めて、これからの分析に繋げないといけない。
イリは唇を真一文字に結んで、少年の言葉を待った。
「まず、過程を切り捨てて言おう。お前にはファクトリア学園に行ってもらう」
ファクトリア学園？
それは確か、王国の中心に近い位置にある学園の名前ではなかろうか？
学べる事は多岐にわたり、作物の仕入れの仕方から魔法の唱え方まで学べるだとか。
そんな高級そうな学園に何故行かねばならぬのか？
そも、そんな場所に行くほどの金などあるわけないだろうに。
イリは、あまりに現実味の無い言葉に先程までの警戒心を忘れ、必死で少年の話の現

実感を得ようと頭を回していた。
そんなイリを尻目に少年は言葉を続ける。
「…んで、その理由だが…お前に教える道理が無いから教えん」
否、終わった。
「教える道理が無いって何ですかあぁぁぁぁぁ!!」
あまりにぞんざいな少年の対応に、先程まで必死に頭を回していたイリの怒りが爆発して、肉体言語に移り変わった。
飛び掛ったイリを片手であしらいながら、少年は冷ややかな目を向ける。
「テメエのそういうところだよ。すぐ頭に血が上って、人様に襲い掛かるような奴には教えれんよ」
「む」
少年のイラついた言動から繰り出される正論に、思わずイリは動きを止めた。
冷静になって考えると、先程の行動は少し粗野だったかもしれない。
そう思ったイリは、目線を宙に彷徨わせてから、覚悟を決めて真っ直ぐ少年を見つめて頭を下げた。
「…すみませんでした」
「…殊勝な態度じゃないか」

心底意外そうな顔で少年は言った。
それほどまで意外なのか、と思い、イリは自分がどう見られているのか気になったが、今訊くのはマズイだろうと判断したので頬を膨らませるだけにしておいた。
「さて、話しは逸れたが何か訊きたい事はあるか？」
手を打って少年は視線を集める。
その場慣れした様子に驚きを覚えながらも、自分が未熟なだけかもしれないと思いなおし、結果的に気分が落ち込んだ。
「はあ……一つ、訊きたい事があります」
無愛想な少年は、イリを一瞥して続きを促す。
「私はファクトリア学園に行って、何を学ぶのですか？」
話を聞いたときからずっと疑問だった。
ただの村娘に高等な学園に行かせて、いったい何を学ばせたいのか？
真剣な顔の少女を見て、少年はニヤニヤと笑った。
そして、触れる。
少女の禁句に。
「戦う術だ」
「は？」

今までの一切の感情が抜け落ちた。
代わりに芽生えるのは、激しい怒り。
今すぐに口に蓋をしてやろうか、と思う暴風の様な気持ち。
イリの様子に気付いた村の人々は、驚愕に晒される。
今まで見せたことの無いレベルでの、怒り・嫌悪・敵意、を露わにしている。
見惚れるほどに綺麗に笑う顔は、一切の表情を削ぎ落としたかのように感情をうかがわせず、握り締めた両手からは血が垂れてきている。
イリが生き物を傷つけることを毛嫌いしていることは知っていた。
だからと言って、僅か12歳の少女がこれほどまでの感情の表し方をするだろうか？
【これ】が自分たちが育ててきた少女か、と思うと恐怖が湧いた。
その悪意をぶつけられた少年は、心底面白そうに笑う。
やっと、やっと【バケモノ】の本性が見えた、とばかりに。
「…なんだ、いい顔するじゃねえか。この言葉はお前の怒りに触れたか？」
「ええ…触れました。私が生き物を傷つける術を学びたいと思っている、と？」
イリの声は日常で聞かせる心地良さを失い、氷の様な冷たさに満ちている。
平坦なその声はイリを知るものであれば驚くくらい、イリの声とは乖離していた。
「いいや思わないさ。お前はそういう生き物だ」

その声を聞いてもなお、少年の態度に恐れはない。
むしろ先程よりも、会話を楽しんでいるかのように見える。
「それを知っているのに、何故わたしの怒りに触れたの？」
少年の発言のオカシサにも気付かずに、少女は質問を続ける。
その質問に少年は笑う様に、あるいは泣く様に、顔を歪ませて答えた。
「お前が嫌いだからだよ」

第六話　少女と嫌いの恐怖

「嫌い…嫌い？」

初めて他人から受け取った【嫌い】という感情をイリは処理しかねていた。

もちろん、【嫌い】という概念は知っている。

物語にだってしょっちゅう出てくる。

しかし、その感情が出てくるたびに首を傾げたものだ。

どうしてこの人はあの人が【嫌い】なんだろう？

そもそも【嫌い】というのは、どんな感情を指す言葉なんだろう？

そう思い、物語を読み進めると心理描写は出てくる。

だけど、そこに書かれている内容はこれっぽちも理解できなかった。

それ故に、その未知の感情に恐怖さえ感じていた。

そんな感情を今、少年に向けられている。

理解できないものほど怖い、とは言うが、理解した今も【嫌い】という感情は怖かった。

剥き出しになった少年の感情は、イリに【嫌い】という感情を理解させるには充分す

ぎるほどで、体は萎縮してしまった。
「それで…お説教の続きはねえのかい？」
少年の一言にイリは意識を少年に戻す。
何か口を開こうと思うのだが、歯がカチカチというだけで、口は一向に命令を聞いてくれない。
誰からも嫌われたことのなかった少女には、少年の感情は精神的ショックが強すぎた。
それこそ、先程までの他者を圧倒する少女から、恐怖に震える少女にされるくらいには。
「…一週間の猶予。よく考えて消費しろよ」
そんなイリを一瞥した後、少年は興味を失ったようで、後ろ手を振りながら暗い森の中に入っていった。
イリは少年が去った後も、しばらく動けなかった。
先程まで、口を結んで事の推移を見守っていた村人達が心配そうに声をかけたが、それに反応すら出来なかった。
考えるのは一つの事。
どうして動けなかったのか？

彼はイリに【嫌い】という感情をぶつけただけだ。
そこにイリの動きを阻害する要素など無いはずだ。
でも…だったら、何故動けなかったのか？
何度考えても思考は、理解できない、と平行線を辿る。
何度かの思考の後、イリの脳内で電気が弾けた。
この問題を解決する【答え】を持っているのは、この問題を引き起こした少年な気がする、と。
しかし、面と向かって尋ねるのは怖い。
思考はシフトし、どうやって少年に尋ねるのか、という一点に絞られた。
①面と向かって訊く。
ダメだろう。
今も先程までの事を思い返すと怖いのだ。
②誰かに訊いてきてもらう。
…これもダメな気がする。
この答えは、面と向かって聞かないといけない気がする。
これ以外なにも思いつかないイリには、結局①の方法しかないのだ。
すごーくイヤだと思う。

だが、やらねばならない、という使命感にイリは突き動かされていた。
バスターに引き摺られるなか、イリは覚悟を決めた。

時は巡って次の日。
妙に現実感の無いふわふわとした気分でイリは眠りから覚めた。
その理由は分かる。
このままいけば流されて、後6日でこの村を出なくてはいけない。
そう分かってはいるのだが、こんな気分なのはどうも実感が湧かないせいだろう。
（あの少年を捜さないといけなませんね）
寝起きの頭でさえパッとその事は思い出せる。
それほどまでにイリの中で【答え】を得たい、という欲求は強いものであった。
少年の居場所に心当たりは無い。
しかし、養母に訊けばなにかしらは分かるだろう。

そこまで考えると、イリは髪を梳かすことさえせずに階段を下りた。
「イリ…何の用だい？」
イリの内心を見透かすような目で、養母は問いかける。
一瞬足が竦んだがすぐに、知りたい、という欲求に上書きされて口は動いていた。
「…先日のあの少年の居場所を知りませんか？」
「あの森の前に居るよ」
背を向けたままの養母の言葉は優しかった。
この言い分だと、昨日イリが家を抜け出したことも知っているだろうに…
「ありがとうございます」
様々な感謝を込めて少女は、乱れた髪のまま外へ駆け出す。
養母はその後ろ姿を眩しそうに見つめて、少女を送り出した。
「午後には戻って来るんだよ」

（居ました）
意気揚々と家を飛び出してきたのはいいのだが、声をかける段階で躓いてしまった。
実際、目の当たりにすると恐怖で足が竦み、身動きさえとれない。
どうしようかと唸るイリを見かねたのか、少年は呆れた目で声をかけてきた。
「嫌われた相手に何の用だ？」
「う…」
この少年の言い回しが苦手だ。
この嫌味のきいた一言。
それがどうも肌に合わない。
イリは心の中で文句をこぼす。
だが、この際文句も言ってられない。
訊きたい事だけを話す。
「…何故、私はあなたに【嫌い】と言われただけで動けなくなったのでしょうか？」
「はあぁぁぁぁ」
盛大に溜め息を吐かれた。
何故でしょうか？、と疑問符を浮かべるイリを、少年は心底冷え切った目で見つめる。
「……なあ、お前は俺をからかっているのか？」

少年から吐かれた言葉にイリは、滅相も無い、とばかりに首を横に振る。
その様子を見た少年は、数秒考えた後に呟いた。
「お前の、その純粋さが恨めしいよ」
「何故ですか…？」
思わず口に出た問いの言葉は、少年の神経を容易に逆なでした。
「何故ですか…ね。お前はそんな立場で居られたのか…」
少年の声に、得体の知れない力が篭っていく。
「なぁ、イリ。お前はさ…物心ついた時から、殺し合っている人生なんか考えられるか？」
ただ淡々と話しているだけだ。
そこに何の力も無い。
それなのに、背筋が震えるような悪寒は強まっていくばかり。
悪寒は止まらず、問いに答える事が怖くなる。
それでも、口を湿らせて言葉を吐き出す。
そうしないと、少年は止まれそうになかったから。
「……考えられません」
「だよな」

短い応答。
その３文字に込められた感情は窺い知れないが、どう考えても良い感情ではないだろう。
次は何を言うのか？
次はどんな感情をぶつけられるのか？
その全てが、永遠に感じる時間の中でぐるぐる回る。
永遠が途切れる時が堪らなく怖い。
故に、何もしたくなくなる。
考える事も、心を動かす事も、生きる事も。
それこそ・・・昨日、少年に【嫌い】という感情をぶつけられた時以上に。
不意に、少年が口を開いた。
「……答え、分かったか？」
(???)
この少年はいきなり何を言ってるのだ？
先程まで私を威圧していたくせに。
などとイリの頭をよぎるが、深く考えてみると少年の言葉の真意がわかったような気がした。

「もしかして…先程までの行為は、答えを教える為の…演技ですか？」
「お、よく分かったな」
冗談だろう？
先程までの感情・雰囲気・表情。
その全てが本物だったと思うのだが…
でも、少年が言うのなら演技なのだろう、とイリは自分を納得させる。
（昨日…私が動けなかったのは【恐怖】のせいでしたか…）
少年が教えてくれたことを元に、昨日の光景・心情を『意図的に』フラッシュバックさせる。
……確かにそうだろう。
【怖い】
その感情だけで、動けなくなるほど人は弱かったのか？
それとも、イリが特別に弱いだけなのか？
それは分からない。
きっと、誰にも分からないことなのだから考えても無駄なのだろう。
…それでも、ふと思う。
恐怖で動けないほど弱かったから、自分はモンスターを見殺しにしてしまったのか、

と。

恐怖に支配されても動けていたら…

そんなｉｆを考える。

そうであったらボロボロの体でも動けただろう。

動けていたらバスターに自分の意思だけは伝えられたのではないのか、と思う。

それで何が変わるわけでもないだろうけど…

こんないろいろな思いが矢継ぎ早に過ぎ去っていくのを、イリは目を閉じて見送った。

そんな悲痛な表情の少女を、少年は黙って見つめていた…

第七話　少女と村の秘密

［ｐａｒｔ…???］

俺の答えを反芻しているのか、イリは黙って目を閉じていた。

【嫌い】という感情。

【恐怖】という感情。

穢れを知らない少女には、どう映ったのだろうか？

醜く映ったのか、それとも尊く映ったのか…

俺には、少女の世界を知る術は無い。

それでも微かに思う。

どうか…尊く映っていてほしい、と。

［ｐａｒｔ…???…ｅｎｄ］

イリは、たくさんの思いを胸に抱いて目を開く。
眼前に広がるのは、死と暴力の気配に満ちる森を背に、真っ直ぐと立っている少年の姿。
その景色は綺麗だった。
どれもこれも、イリが悪感情を持っているものに満ちているのに、それでもなお、世界は綺麗だった。
「考え事は終わったか?」
少年の声が静かに響く。
何故かその声に、今までのような不快感を感じず、イリは少年に初めてまっさらな感情を抱いた。
「…はい。ありがとうございました」
そう告げる自分の声が、どうも新鮮な気がしてくすぐったかった。
少年も新鮮さを感じたのか、意外そうな顔でイリを見つめる。
「へぇ…良い変化じゃねえか」

「えっと…ありがとうございます？」
少し意外だった。
少年がイリを褒めるなんて。
てっきり彼は人を褒める事が無いと思っていたから、少しだけ胸が温かくなった。
思えば初めてかもしれない。
イリの事をキチンと見てくれる人は。
村の皆は甘いだけで、優しいわけではない。
彼らはよっぽど危険でなければ、本気でイリの行動を否定したりしなかった。
その甘さに浸っていた自分が否定できるわけではないが、本当の優しさというものは、彼らから与えられていないもの。
これはイリの自論だが、優しさというものは嫌いな相手に接するときほど見えるものだ。
好きな相手だったら、優しくしようと誰もが考えるだろう。
逆に嫌いな相手だったらどうだろうか？
優しくしようとは、なかなか考えられないだろう。
この少年はイリのことが嫌いと言った。
だけど、イリの質問にはしっかり答えてくれた。

だから、この少年は真に優しい人だと思う。
それを告げたら少年は、馬鹿だろお前、って言うだろうから口には出さない。
その代わり、一つだけイリは問いを投げた。
「あの…今更ですが、あなたのお名前は何ですか？」
「…クロス。よろしく」
少年は短く名乗った。
しかし、不機嫌なわけではなく。
その瞳は、面白い奴だ、と告げていた。
「はい。クロスさんですね！よろしくお願いします!!」
少女は綺麗な瞳でクロスを見た。
少年はその時に実感した。
（ああ、コイツなら綺麗なものも汚いものも、全てを尊いものだと受け入れてくれそうだ）
穢れを見ずに、綺麗なものだけを見続ける。
イリは、クロスが想像していたそんな少女では無かった。
（コイツの護衛…今ならやってもいい気分だな）
隠れ里で育てられている『聖女』を守り抜く…それは上司に命令された事。

どうせ『聖女』とやらは、死と暴力の匂いが染み付いている者を遠ざける様な人物だと思っていた。
でも…違った。
イリはこんな自分に近づき、あまつさえ親交を深めようとしてきた。
だから、苛立ちと少しの困惑があって、一度は拒絶した。
それでも彼女はクロスに歩み寄った。
最低限の親交しか深めたことのなかったクロスにとって、その行動は驚くべきものだった。
「…あの、クロスさん。一つ、言っておきます」
そんな少女はクロスを真っ直ぐ見据えて言った。
何故そんなに真面目そうなのかは分からないが、クロスは続きを促す。
「ファクトリア学園なんて、絶ッ対に行きませんから!!!」
そう言い放ってイリは、クロスに背を向けて駆け出していった。
一人残されたクロスは溜め息を吐く。
（面白そうなのはいいんだが、もうちょい聞き分けが良くならなかったのか？）

「ファクトリア学園なんて、絶ッ対に行きませんから!!!」
あの後家に帰ったイリは、ドアを開けると同時に養母とバスターに、クロスに言った事を一字一句違えずに言い放った。
二人はいきなり言われたので面を食らったが、イリの真剣な顔からして本気なのだと実感した。
これは面倒な事になった、と思いながらも、イリの言葉を覆す為の情報を集める。
「何故だい？」
養母がイリに尋ねる。
その声色は全てを見透かしているようで、イリの身は強張る。
ゆっくり息を吐く。
それだけで震えは止まった。
言葉にしないと何も伝わらないから口を動かす。
この際全て話してしまおう、と。

「…別れたくないんです。甘くて…罪深いあなたたちと」
「「…罪深い？」」
養母とバスターの声が重なった。
たったそれだけの事が、これから話す事を考えると、彼らも【共犯者】だと感じてイラついた。
「はい。あなた方は…いえ私も含めて、罪深い」
イリはそこで一旦言葉を切ると、後ろを向いて泣きそうな顔で微笑んだ。
「…どうか聞いて下さい。私達の罪深い在り方を」
扉を開けて真っ直ぐにクロスが入ってきた。

私が、村の秘密を掴んだのは、夏祭りが終わる直前。
そろそろ帰ろうかと、踵を返したときに話し声が聞こえたので、普段は近づかないような村の隅に行った時です。

そこは、祭りの明るさが嘘のように暗くて、少し不気味な場所に思えました。
体をさすりながら歩を進めると、やがて人影が見えました。
人影は、見かけない子供と、大勢の村の皆さん。
村の皆さんは感情を感じない目で子供を取り囲み、子供は酷く怯えていました。
そこは、異様な空気を醸し出していたので、思わず声を掛けずに身を潜めました。
「おい…お前、どこから入った?」
いつも土いじりをしながら元気に話してくれるフォースさんが、今まで聞いた事もなかった、感情の起伏を感じられない声色で子供を問い詰めます。
「ぼ、僕は、ただ迷って……気付いたらココだったんだ」
子供は、足を震わせながらも気丈に話しました。
それなのに、子供に向ける瞳は冷たいまま。
ざわざわと木々のざわめきが強く、私の本能がこのままだと悪いことが起こる、と警鐘を鳴らしていました。
(前に出なければいけない)
そう思うのに、足は一向に動きません。
(なら、声をかけなければいけない)
そう思うのに、喉は痙攣するだけで、如何なる音も発しません。

「そうかい……なら、コッチに来なさい」
私が自分の不調に手をこまねいている間に、テンさんが落ち着いた声を出して、子供を手招きします。
子供は一瞬だけ躊躇いました。
ですが、意を決してテンさんに着いて行きました。
それが、決して良い行動ではないと気付いているのは私だけなのに…何も出来ませんでした。
それを
それを
それを
見送る
見送る
見送る
足は動かず、声は出ない。
何故？
何故？
何故？

分からない。分からない。分からない。分かりたくない。
知りたくない。知りたくない。知りたくない。私は知りたくない。

だけど

都合良く呪縛が解けた足は、暗い森に消える彼らを追っています。
映像を眺めていた目は、自らの意思で彼らを見据えています。

だから

私は、醜いのでしょう。

第八話　少女と養母のふれあい

そうして、少女の流れるように紡がれた話は終わった。
話し終えた少女は、昔日の光景を瞼の裏で繰り返し、話を受け止めた二人の大人は、後悔と罪悪感を顔に浮かべた。
その中で、少年だけが妙に冷めた感情を抱いていた。
重苦しい空気の中、静かにクロスは少女に言葉を投げる。
「…なあイリ。お前は俺にこの話をして、何を感じて欲しかったんだ？」
少女…イリは瞼を開けて、白銀に輝く瞳でクロスを見つめた。
「そうですね……おそらく、ただ聞いて欲しかっただけなんです」
「そうか……じゃあ、コイツらには？」
話の矛先が向いた大人達は、冷静に話す子供達を仰ぐ。
まるでその様子は、大人と子供が逆転したかの様だった。
「…理由を、理由を説明して欲しかっただけです」
自分の感情を明確に口にしたイリは、瞼に焼き付いていた昔日の光景が、少し薄れていくのを感じた。

（おそらく…理由を説明してもらわなくても、この光景に囚われる事はもう無い）
自分の中で、過去と決着がついたのだとイリは悟った。
あの子供を見捨てた罪悪感はある。
それは一生イリに付いて回るものだろう。
それは【罰】として甘んじて受け止める覚悟が決まった。
「何も…何も言えませんか？」
黙ったままの大人達に問いかける。
いや、【問いかけ】ではなく【確認】だった。
「…ああ、何も言えない。俺もオババも何も言えない」
ある種の覚悟を滲ませる声で、バスターはイリの望みを絶つ。
見れば、養母も同じような覚悟を感じさせる顔をしていた。
しょうがない、とばかりにイリは微笑む。
「そうですか…理由を説明してもらえる日はくるのでしょうか？」
「ああ…お前がもっと【世界】を知ったらな」
バスターはそう言って、イリに追求される前に、そそくさと去っていった。
「ずいぶん勝手な奴だな…」
呆れ混じりにクロスが呟く。

イリも内心、自由な人だなぁ、と思っていたので弁明はしない。
ただ、曖昧に微笑んでおいた。
その枠にクロスも入っていることを悟られないように。
「さて、面白いモンが見れたから俺も帰る。後は、二人で話し合ってろ」
やっぱりバスターさんと同じなんじゃ、と思っているイリを、すり抜けざまに軽く叩いてクロスも去っていった。
残ったのは、家の住人だけ。
静かになった家を西日が照らす。
茜色に照らされた二人の間に、沈黙が下りる。
お互いに、何から話したらいいか分からないが故の沈黙。
崩れるとしたら一瞬。
されども、その一瞬が訪れない。
静かな緊張感の中、イリの手に汗が滲む。
「イリ」
短い呼びかけ。
話す為の糸口を探しての言葉。
養母の口から出たのは、そんな稚拙な言葉。

「はい」
イリの口から出たのは、単調な返事。
（何で気の利いた言葉が出ないんですか…）
心の中で自分に毒を吐く。
これでは、おばさまと会話が出来ないではないですか、とついでに思っておく。
ちらっと確認すると、やはり目に見えて養母はうろたえている。
どんな時でも、イリが会話の発端を作り、イリが会話を盛り上げていた。
その逆になった事は滅多になかった。
その弊害が今、目に見える形で現れた。
すなわち、イリが会話の主柱になることが出来ない場合、この母娘は会話が出来ない、ということだ。
イリは数度脳内で溜め息を吐いてから、養母の手を引く。
「イ、イリ？」
困惑した声が背中越しに聞こえてきたが、あえて無視したまま手を引く。
階段を上り、ドアを開け、イリの部屋まで着いたところで、ようやく手を離す。
遠退いたぬくもりが、少しだけ惜しいものだと思ったが、軽く手を握ることで誤魔化した。

「おばさま。一つだけ聞かせてもらいます」
イリは振り向いて、挑戦的な目で養母を見る。
養母は、覚悟を滲ませる目でイリを見る。
「あなたは、私に出て行って欲しいですか?」
「違う!」
自分から思わず飛び出した声に、養母は驚愕に晒された。
イリの事は愛している。
その反面、イリの事を恐怖の眼差しで見たことが何度もあった。
それでも……それでもイリを大切に思っていたのだと、養母はたった今実感した。
「ね…あなたのわたしへの想い、全て聞かせてくれませんか?」
ポロポロと涙をこぼしながら、イリは幼子のように養母に抱きつく。
「……イリ。アンタは不思議で不気味な子だった」
少しの間目を閉じてから、養母はおもむろにイリの背中に手を回して話し始めた。
「でもね…アンタはアタシらには無い優しさを持っていた」
イリの部屋に家族の声だけが響く。
「そういうところにアタシらは惹かれた……アンタがどういう存在か知ったうえで」
殺風景な部屋が、今だけ色鮮やかな華やかな部屋のように感じられる。

「ねえ、イリ…アタシはアンタに行ってほしくない」
抱きつく手を緩めて、家族の顔を見上げる。
「でもね…個人の感情だけでアンタを閉じ込めておく事は出来ない。アンタは世界の危機に現れる存在だから」
イリの触覚は、養母の話を聞きながらも、小刻みに揺れる手を鋭敏にとらえていた。
その瞬間、イリの目に映ったのは、苦しみに耐えるただ一人の人間。
イリが救いたい存在の一人。
「私の事、愛していますか？」
気が付いたらイリは問いを放っていた。
自分でも何故そうしたか分からない。
でも、正しい行動だと思った。
養母の話の通りなら、自分は世界を救う存在なのだから。
唐突なイリの問いに養母は疑問符を浮かべたが、その意味を訊く事はしなかった。
…自分たちがやっていることだから。
代わりに、答えを返す。
「アンタがアタシを愛していなくても、愛しているよ」
「ありがとうございます。私も、あなたを愛しています」

間髪入れずにそう告げた少女の顔は、今までに無いくらい、美しく可憐な微笑みを携えていた。

養母は、数秒程見惚れてしまった。

そのくらいに、少女の笑みは人間を惹き付ける笑みであった。

「だから、私はファクトリア学園に行きます。そこに行くのは世界を救うためなのでしょう？」

その笑みを携えたままなのに、何故か少女は不気味に映った。

第九話　少女と教育

旅立ちの準備は面白いほどするすると進んみ、僅か一日で全ての準備が終わった。
元から、イリをファクトリア学園に行かせたかった事もあったのだろうが、それだけではないとイリは勘付いた。
おそらく、養母はイリの顔を見るのが辛いから急いだのだ。
結局、一週間とクロスが定めた期間を五日も前倒しにして旅立つ羽目になった。
ちなみに、バスターがイリの師匠になるという話だが、尋ねてみたところ
「あ？あの少年が教えてくれるだろうから、俺の師事なんていらん」
と、面倒事が減ったとばかりに、清々した笑みを浮かべて答えた。
思わずジト目でイリはバスターを見た。
あまりよくない行動だが、それを責めるような人はいないだろう。
現在、クロスがお前に足りないものを教えてやる、と息巻いてイリを外に引っ張って来たところである。
イリを引っ張っている最中、クロスがとても邪悪な笑みを浮かべていたのが、凄く気がかりだ。

「さて…イリ。お前に足りないものは何だと思う？」
肩慣らしとばかりに、クロスが飛ばした質問をイリは真剣に考える。
（足りないもの…心当たりはたくさんありますが、果たしてどれが正解なのでしょうか？）
そんなイリを見て、クロスが悦に入っている事を少女は気付かない。
「考える必要は無い。今、お前に必要なのは俺の話を理解することだけだ」
自分から質問したくせに、問答を交わす気は無い、とばかりに一刀両断。
クロスは今まで以上に一方的に話す。
そんなクロスの様子に、警戒心がＭＡＸまで引き上げられたイリだが、逃げることは出来そうも無い。
観念して話しに付き合う。
一応、ためになる話らしいので…
「…分かりました。本題に入ってください」
「了解」
そう返事をすると、クロスは目を閉じて集中し始めた。
…大気が震える。
それに合わせて、イリの体が疼く。

体の内から突かれたような衝撃。
イリは体を硬くさせ、この異常な事態が過ぎ去るのを待つしか出来ない。
時間にして数秒。
体感にして数分。
今、景色が揺らぎ…ナニカが発生する。
それは、二対の【影】だった。
片方は筋肉質な体。
もう片方は凹凸の激しい体。
何故か、そんな風に見える。
（もしかして…男性と女性を模しているのでしょうか？）
イリが考察している間に【影】は動き、クロスの横に並んだ。
その光景は、クロスが悪の組織のリーダーかの様に見える。
「コレ…何だと思う？」
「魔法…ですか？」
クロスの質問にイリは間髪入れずに返答をする。
既に、いかに最速でこの話を終わらせるか、にイリの意識は向いていたからである。
最速で駆け抜ける為には、自分の精神的犠牲も許容するつもりでもある。

「そう、魔法だ。もっと具体的に言えるか？」
「はい。確か…私達の体内にある魔力の性質に応じて、世界中に蜘蛛の巣状に張り巡らされている霊脈に宿っている、様々な現象を発生させる事の総称…でしたよね？」
クロスに説明している間、何故か聞いたことがあった様な気がするフレーズが浮かんだ。
『魔法で世界は救えない。世界を救うのは一人一人の意思だ』
そのフレーズは頭の中で何度も反響して、イリに寂寥感を味あわせた。
身に覚えがないはずなのに…
イリの心情を知らずに、クロスは驚いた、とばかりにイリを見る。
「よく知ってるな。馬鹿だと思っていたが…もしかして、馬鹿じゃねえのか？」
イリを馬鹿にしている発言だったが、イリは別の事に気をとられていた為、無意識に頷くだけで済んだ。
もし、キチンと聞いていたならば喧嘩になっただろう。
そうなれば、お互い不毛な時間を過ごす事になる。
この忙しい時に、それを避けられたのは幸いだろう。
「…よし。今からコイツを使ってお前に教えてやる」
「何をですか？」

「男と女の営みについて」
それはすごくためになる話だったが、何が何でも止めるべきだった、と後にイリは語った。

「んで…理解したか?お前が初対面で俺にしたことが、どんな事を引き起こす可能性があるか」
ニヤニヤと意地悪く笑いながらクロスは問いかける。
対するイリは、耳まで真っ赤になった顔を覆って悶えていた。
「その様子だと理解したようだな。微妙に面倒臭い魔法を使った甲斐があった」
「ソーデスネ」
イリは顔を覆ったままテキトーに返事をする…が、手の隙間からクロスの下半身をチラチラと見ている。
かと思えば、自分の下半身を見ている。

そうして、一層と顔を赤くさせている。
「…興味あんのかエロ娘？」
その様子に目敏く気付いたクロスがからかう。
声をかけられたイリは、大きく跳ねてからブリキ人形のようにぎこちない動きで、視線をクロスの顔に持ってきた。
「…ええっと…ありますけどないです」
いまいち要領を得ない返答に、もう一回、とばかりにクロスは視線を飛ばす。
その視線に気付いたイリは、しきりに顔を擦りながら説明を付け足す。
「あ～う……あの…その行為が齎す結果には興味がありますが、その行為を体験したいわけではない…という事です」
それだけ言ったイリは、回れ右をして全速力で逃げた。
よっぽど恥ずかしかったらしい。
よくよく見れば地面が濡れていた。
「しょうがねえなぁ…」
そう呟いて、クロスは濡れた地面を辿っていった。

第十話　少女と感情

［ｐａｒｔ：イリ］

私は一体何なのだろう？

人として備わっているべき感情が、いまいち足りない存在。

クロスさんと出会ってから、そんな疑問が際限無く浮かんでくる。

そのたびに考えないようにしてきたけど、一向にこの考えは消えない。

それが――――鬱陶しい。

けれど、この感情さえ作り物。

模倣しきれていないものにすぎない。

人は誰しも感情を模倣しているけど、私の模倣は少しだけれども致命的に完璧ではなかった。

それは例えるなら、彫像の一部が欠けている。かすり傷が出来ている。

そんな小さなもの。

だけど、彫像は一部が欠けているだけで芸術的価値が薄れ、かすり傷は小さいのにピリピリと痛みを訴えてくる。

どれも些細な点だけれども、決して無視できないもの。
私の模倣のミスはそのようなものだった。
クロスさんと出会ってから、何故自身の感情について考え始めたのかは分からない。
村の皆さんと生活している中では考えた事なんてなかった。
それが…不思議で堪らなかった。
［ｐａｒｔ：イリ：ｅｎｄ］

村外れに立派な馬が立っている。
立派な馬は誇らしげに、己と同じくらい立派な荷台を引いている。
そこに近づくのは少年少女。
少年は、慣れた様子で立派な馬を労う。
少女は、慣れない様子で立派な馬を眺める。
不意に、少女が声を上げる。

「クロスさん！クロスさん！」
少年は面倒臭そうに、少女に応対する。
「はあ……何だ？」
少女はそんな少年の態度を意にも返さず、興味の対象を眺めつつ言う。
「これが、『馬』という動物ですよね!?」
「はいはいそうだよ。珍しいか？」
雑な少年の対応に、少女は満面の笑みを浮かべて応えた。
「はい、珍しいですよ！生まれてこの方初めて『馬』という生き物を見ました！」
「…へぇ。なら、馬車に乗った経験も無い訳だ。気をつけろよ」
…もの凄く最近見たような邪悪な笑みを浮かべているクロスに、イリの警戒心がＭＡＸまで引き上げられる。
実際、気をつけろ、というのは本気だったのだが……

「おろろろろろろ」

意気揚々と馬車に乗り込んだまでは良かった、とイリは思う。

あの後はしゃぎ過ぎたのがいけなかった。

現在、イリは馬車の隅っこで吐いている。

気分は、なかなかに最悪だ。

【酔う】という感覚がここまで気持ち悪いものだとは、思いもよらなかった。

完ッ全にナメていた。

「大丈夫か？」

イリの背中をさすりながら、クロスは呆れた眼差しでイリを見ている。

「うっぷ……大丈夫です…うぇ」

吐く合間をぬって、イリは大丈夫と言うが、どう見たって大丈夫じゃない。

そんな少女を眺めながら、クロスは少し前の出来事を思い返していた。

イリを辱めた後に逃げられたわけだが、しばらくするとイリは髪飾りを付けて戻ってきた。
クロスから見て右についた髪飾り。
それは花の茎みたいなもので、イリの白色のもみあげに巻きついていた。
「どうしたんだ…それ？」
「おばさまから貰いました」
クロスの質問に素っ気無く答えると、さっさと行こう、とばかりにイリは急かす。
その目元が赤いのはさっき泣かせたからだろう、と見当をつける。
何故急いでいるのか気になったが、泣かせた負い目があるせいか訊くことが出来なかった。
そして、そのまま流される様に動いた。
「私は世界を救うんですから、障害になんて躓きませんよ」
その際、挑戦的な目でイリが言った言葉だ。
（早速躓いてんじゃねえか…）
現在の様子を見て、クロスがそう思うのも無理はないことであった。

場面は戻り、現在。
吐き気はなくなってきたが、依然体調が優れないのかイリは横になっている。
地面の凹凸が激しいのか、それともこれが普通なのか、ガタゴトと馬車の演奏は鳴り止まない。
（どうすれば、この揺れはおさまるでしょうか？）
あまりにも揺れが酷いので考えてみよう、と思った。
が、考えるのも面倒臭くなってきたので、目の前のクロスの動きをボーっと眺めることにした。
（縦、縦、横、横、右斜め、左斜め、納刀……？）
「って!!それ、武器じゃないですか!!」
「元気だなぁ……体調はもう大丈夫か？」
「あっ…少し、少し良くなりました。看病してくださってありがとうございます」
そう言って微笑むイリはまだ具合が悪い様で、荷台の壁に寄りかかってジッとしていた。

だが、すぐに表情を一転させて少女は怒る。
「それよりっ、何でそんな危ない物振り回しているんですかッ!!?」
「…体調悪くてもうるせえなぁ、お前は」
煙たそうに顔をしかめてテキトーな対応をするクロスに、イリの心は加熱していく。
「うるさくて結構です!!とりあえずその危ない物、私に預けてください!!」
「……ほらよ」
少し考えたクロスは結局、振り回していた飾り気の無い黒い短剣をイリに向けて投げた。
短剣は綺麗な弧を描いて、まるでどうでもいい物の様に無造作にイリの足元に軽い音を立てて落ちた。
足元に落ちた短剣に若干びっくりしたイリは、非難の眼差しをクロスに向けながら、器用に足で短剣を手元まで飛ばして拾う。
あまりにも容易に手元におさまった生き物を傷つける為の道具。
ためしに鞘から抜いてみると、イリの柔肌を簡単に傷つけられそうな鈍い光が目を貫く。
その光を見ている内に理解した。
この輝きこそが人を狂わせ、戦いに駆り立てるのだと。

ならば

コレを壊せば闘争が無くなるのか？

「イリ？」

不意に滑り込んで来たクロスの声に驚いて、イリは軽く跳ねる。

どうやら相当思考に囚われていたようですね、と苦笑しながら、何でもないですよ、と手振りで誤魔化す。

丁寧に納刀してから、そっと床に置く。

結局のところ、コレを壊しても闘争が無くなる筈がないから。

人は武器に頼り、己の肉体を甘くみているけど、最後に頼るのは己の肉体のみなのだから。

この肉体があるかぎり、人は争える。

真に争いをなくしたいのならば、人を滅ぼすしかないだろう。

育った村は未だに近く、目指している町は未だに遠い。

だったらいいだろう。

鬱蒼とした森は抗い難い眠気を誘うから、次の町に着くまでは……

第十一話　少女と空気

小鳥のさえずりが少女の耳を打つ。
やかましく、けれども心地良い生命の音のおかげか、穏やかな目覚めになった。
イリは目をこすり、自分は何をしていたのだったかを、少しずつ確かめる。
その間、おぼろげな視界を左右に動かし、見慣れない風景を目に刻む。
暗い場所のようだが、上部の方に付いている小窓から日の光が差し込んでいるおかげで真っ暗ではない。
そこに座って柔らかな陽光に照らされている少年が居た。
名前はクロス。
イリが村から出る原因をつくった少年。
怖いようで優しい少年。
正直に白状すると、イリは自分がクロスをどう思っているのかが分からない。
最初は嫌いで怖かった。
けれど、すぐに彼の優しさに触れた。
そのせいで、悪感情はなくなったけれど好きなのかは分からない。

そんな少年はイリが起きたのを目に留めて、ゆっくりと立つ。
そして無言で歩み寄ってイリの隣に座った。
「よう、良い目覚めか？」
「はい、良い目覚めですよ」
よくある何気ない会話。
けれど、そこから分かる事もある。
例えば、クロスの声色。
最初に会った時の声色と比べると、少し柔らかくなっている。
例えば、クロスの眼差し。
最初に会った時の眼差しと比べると、少し緩んでいる。
そんな分析をしながらイリは立つ。
「それで…ここはどこですか？」
馬車の内部だという事は分かる。
だが、それ以外が全く分からない。
その…今まで経験した事のなかった状態が少し気味悪い。
「お前の故郷から西方の位置にあるデビュ、という小さな村だ」
デビュ…、と脳内で反芻してもどれくらい故郷から離れたのか、どれくらい学園に近

づいたのかが分からない。
ここは故郷の匂いとあまり変わらないから…
そんなイリの疑問に気付いたのか、溜め息と共にクロスは補足を入れた。
「お前の故郷からは１００ｋｍくらい離れた場所だ。ファクトリア学園までは……あと二日、と言ったところか」
本当に小さくなったよな、とボソッとクロスは呟いた。
その意味するところはイリには分からなかったが、概ね聞きたいことは聞けたので満足して外に向けて歩みを進める。
「おい」
だが、すぐに気付かれた。
このまま外に繰り出したかったイリは、内心で舌打ちしながらクロスに応じる。
「…なんですか？」
「なんですか、じゃねえよ。勝手に外に行くんじゃねえ」
「む…嫌です。あなたに私の行動を制限される筋合いはありません」
あまりにも外に行きたかったイリはつい、喧嘩腰で応じてしまう。
話し終えてすぐに、しまった、とクロスが怒らないか身を縮めてそっと窺う。
クロスは俯いて頭を抱えていた。

初めは、もの凄い怒りのあまりに頭が痛くなったのかと思ったが、どうやら違うらしい。

簡単に手を離して、至って普通の表情で頭を上げた。

これはどういうことでしょうか、と興味深そうに見つめるイリに溜め息を一つ。

クロスは投げやりに告げる。

「…しょうがねえな。ただし、日が沈む前にここに帰って来いよ」

しっかりと釘を刺されたが、もとよりそのつもりだ。

本人の口から許可を貰えてご満悦なイリは、心の中で呟く。

（脱走するのは大変ですからね～）

この少女には手綱でもつけといた方がいいのかもしれない…

意気揚々と見知らぬ村に飛び出したイリ。

観光方針は【気になったものに直行していけ】という非常に単純明快なものとなって

いる。
そんなイリはその場で一度立ち止まり、じっくりと村を観察する。
馬車が止めてあったのは村の入り口だったらしく、目の前には大きなアーチがある。
そこに立掛けてある看板には大きく『珍獣注意!』という訳の分からない事が書いてある。
いったい珍獣とは何なのか?
イリは欠片ほども無い想像力を掻き集めて、珍獣とは何なのかを思い浮かべる。
『珍獣』というからには物語に出てくる空想上の生き物みたいなのだろう、という考えを取っ掛かりに思考を展開していく。
まずは、歩行。
きっと、四足歩行ではなくて二足歩行なのだろう。
次に、姿形。
珍しい姿なだけであると思うので、イリが想像できる範囲の姿だろう。
推測するに、不自然なほどに丸かったり角ばっていたりするのだろう。
最後に、食性。
これは難しいが、この村の周りは見たところ木々だらけだ。
という事は、草食だろう。

まあ、肉食というのも十分にありえるのだが……
そんな事を考えながら、イリは鼻歌交じりに歩いていく。
が、すぐに村の端に着いた。
そうだ…ここは村なのだ。
小さいに決まっている。
その事に思い当たったイリは、肩を落としてとぼとぼと来た道を戻る。
そんなイリを、珍しいモノの様に村人が見ている事に少女本人は気付かない。
その方が幸せだろう。
気付いていたら、自分＝珍獣、という可笑しな考えが、イリの中に芽生える事になるだろうから。
「ねえっ、君!!」
その声が自分に向けられたものだと理解するのに、数秒を要した。
そして、何の様だろう、と考える事一瞬、その声に反応を返す。
「はい。私ですか?」
その声は、イリの前方に立っている子供達の一人が発したものらしく、見知らぬ人に話しかける事による緊張感が彼らの中にあった。
「うん。君っ、どこから来たの?」

今度は誰が話しているのかをキチンと理解出来た。
三人居る少年達の真ん中に立っている、リーダー格の少年が言っている。
話し相手が誰なのか分かれば、話相手の方に体を向けて目を合わせないと失礼だろう、とイリは自身の倫理感に従い行動を起こす。
目を合わせた瞬間、リーダー格の少年の顔に朱が差したのは何故だろう、と思いつつも同年代の子とのコミュニケーションを楽しむ。
「えっと……あちらの方の小さな村からです」
「あっち？」
イリは自分が来た方向を指差した瞬間、少年は不思議そうに聞き返した。
（クロスさんに教えてもらったので間違っていないと思うんですが…？）
とりあえず、静かに頷くイリ。
途端に、少年達の目が輝きだした。
ギョッと内心で目を剥きつつも、表情に出さないように努力するイリを嘲笑うように少年達は身を乗り出す。
「「すっげえええ!!!」」
「ひッ」
少年達はイリの発言の何が琴線に触れたのかは分からないが、途轍もなくテンション

が上がっていることは一目瞭然。
イリの小さな悲鳴は、大きな感嘆の叫びにかき消されて届かない。
「何て村!?」「どんな子がいる!?」「近い!?」
「あ…えっと、お、落ち着いてください…」
我先に矢継ぎ早に質問する少年達に、大勢と話す事に慣れていないイリはたじたじになってどうしようもできなくなる。
誰か助けてくれないか、と周りを見渡すが大人達は微笑ましそうに見守っているだけで、当てになりそうもない。

――風がざわつく――

イリは少年達を落ち着かせようとして、口を開く。

――地が戦乱の予感に絶叫する――

脳は自身の音を伝達しなかった。
代わりに捉えたのは他人の音。
手足が裂け、脳が潰れる程の狂おしい怒号。
ココに平和は崩れた。
今から始まるのは荒廃した世界を創り出す為の儀式。
…さぁ、開戦だ。
世界を壊そう。

第十二話　分岐点Ⅰ

最初にその気配を感じ取ったのは何だったのか？
人間？
家畜？
植物？
いいや、どれも違った。
この世界において圧倒的強者。
知恵など無くても己が力のみで他者を圧倒する者。
そう、モンスターと呼ばれている彼らこそが最初にその気配を感じた者だ。
他者の血を浴び、それに呼応するように己が残虐性を呼び覚まし、戦を混沌に変えていく。
ソレこそが【彼ら】の存在意義。
争い、血を流す人間達をこよなく愛する者。
そんな者達が戦乱の気配を感じ取ったのならば、やることは単純。
圧倒的な速さで全てを捕えよう！圧倒的な力で屍の山を築こう！

そして世界に【恐怖】を刻むのだ!!
彼らは猛々しく吼える。
目指すはある少女が訪れていた村。
全てを蹂躙する者達が訪れる。

深紅を平和な村が彩った。
イリに話しかけていた少年達の後方で、陽炎の様に存在感の無い何者かが労わるように、そっとリーダー格の少年に刃を刺し込んだからだ。

「えっ？」
生命の幕間のセリフは驚くほど短く、少年の瞳の目映い輝きは即座に失われていった。
途端に響く絶叫。
その轟音はイリに事態を理解させるのを数秒遅らせた。
平時ならばどうでもいいような隙。
だが感じ取れなかったか？…今は平時ではない。
油断など、してはいけなかった。
今はただ、逃げるべきだったのだ。
刹那、血に濡れて鈍く光る刃がイリの腱を切り裂いた。
「ぎあッ！」
突然の痛みに耐えかねて蹲る。
襲撃者の前で蹲る事がどれほど愚考かは分かっていた。
だが、反射的に動いてしまった。
その事に後悔してももう遅い。
数秒後にはイリも死体の仲間入りだ。
諦めがイリの脳裏をよぎる。

だが、生を諦めるのはまだ早かったようだ。
「せあっ!!!」
一瞬でイリと襲撃者の間に立った見覚えのある影が、短剣を振るった。
「ちっ…邪魔が入ったか」
襲撃者はそうぼやきつつも、軽々しくクロスの短剣を、手にした血塗れの長剣で受け止める。
それで止まるほど少年は素人ではない。
直ぐに体を引き、確殺を生み出す為に刃を走らせる。
その速度は閃光。既にイリの目には捉えられない。
ただ分かるのは、互いが互いに凄まじい技量を誇っているということ。
黒の少年は荒々しく精密に剣を振るい、血濡れの襲撃者は猛々しく緻密に剣を振るう。
その攻防は優に１０は超えただろう。
互いに最上の動き。それを追うイリの目はスパークし、静観する鼓膜が震える。
そこまでして尚、どちらも傷一つ付かない。
少年は目を吊り上げ、襲撃者は眉を寄せる。
そんな僅かな休憩を挟み、再度二人は加速する。

共に速度は落ちず、振るう刃に翳り無し。繰り出される一刀一刀が必殺。
研ぎ澄まされた殺意は眼前の敵を斬りふせる、と獰猛に嗤う。
既に互いに全力。
互いが互いに勝ちもせず、負けもしない。
体力、集中力、そのどちらかが切れないかぎり勝敗は決まらないだろう。
理解している。
理解しているからこそ、不味い。
力もリーチも体力も、全てにおいて少年は下だ。
集中力は引けを取らないと自負しているが、足りない力とリーチを補っている分、相手より切れるのが早い。
ここでゲームオーバーは流石に馬鹿らしい。
はぁぁ、と溜め息一つ吐くと、顔を歪めて声を出す。
全ては少女を守る為。
その為ならば、多少はプライドを捨ててやろう。

…何回打ち合ったのかは分からないが、不意に音が止んだ。
その瞬間にイリは気付いてしまった。
――自分は、また戦いに見惚れていなかったか――
唾棄すべき行為。
自身の考えに基づくのなら容認してはならない汚物。
その汚らわしいものを自分は容認し、あまつさえ賞賛している。
何て矛盾。何て冒涜的。
その罪深い在り様に思わず笑みが零れる。
自分は何が…【何を】を守りたいのか？
『逃げるなよ』

脳みそで声が反響する。

『逃げてなんかない。私は…私は、全ての生き物を…守りたい、だけ』

台本通りの苦し紛れの返答。そう、答えはとっくに分かっている。

『いいや、まだ遠い。オマエ…逃げてるだろ』

声は嘲笑う。容赦なく私の心を鷲掴みにしてくる。

『……』

結局、コレは最初から決まっていた会話。声は正しくて、私は正しくない。

『言えよ。お前は【何を】どうして欲しいんだ?』

無限に引き伸ばされた自問自答も終わりを告げる。コレを言えば私は認めることになる。

『わ、わたしは…『私は、全ての生き物に…傷ついて欲しくない』』

声と私で、答えが一致する。

そう…結局は少女(イリ)は少女だっただけの話。

怪力無双な訳も無く、有智高才な訳でもない。

イリは、ちょっとばかり他人より身体能力が高いだけの非力な少女。

世界を救う存在だと言われても、全く持って実感が湧かない。

【守る】だなんて言ってみても、心の中ではその反対。

誰かに守って欲しい
ただずっとソレだけを思っている。
だけど、許せなかった。
簡単に生き物が傷つき、死んでいくのが。
争いは、生き物の本能だと人は嗤い、容認する。
それでいいのか？
本能だから逆らえない。本能だから争う事は正しい。
そうやって生き物の咎から逃げて、逃げて逃げて――どうなるというのだ？
それが分からないから、イリは生き物を傷つけたくない。
「逃げるぞ、イリ」
いつの間にか、イリを傷つけ守ってくれる少年が傍に居た。
その顔は真剣そのもので、自分を守る為に必死に戦っていた事を窺わせた。
イリは後ろめたさから顔を伏せる。
数メートル先に居る襲撃者の表情は、逆光の所為か分からない。
いかなる心境の変化か、これ以上追撃する気も無いようで、血濡れの剣を地面に向けている。
「はい。そう…ですね」

自分が居ても出来ることなど無い。
今の様に誰かに守ってもらわなければ、私は戦場では生きられない。
その事を、いとも容易く斬られた足の痛みが訴える。
唇を噛み、拳を握り締めてでもここから逃げなければいけない。
あの襲撃者の気まぐれがいつまで持つか分からないから…
無力感にさいなまれながら足を引き摺って歩くイリを、チラッと見たクロスは、足を止めて無言でイリを背負う。
「あ、あの…クロスさん?」
少女の疑問の声に耳を貸さず、無言で少年は駆ける。
疑問に構っている暇など無い。
少女は戦乱に巻き込まれたことが無いから分からないだろうが、少年は違う。
戦場で生き残れる実力を持ったものに、無力な村人達は縋るだろう。
助けてくれ…と、俺に死を押し付けてくる。
そんなのは真っ平御免だ。
俺が保護するのは、現状お荷物なイリだけでいい。
「…ありがとう、ございます」
少しの間、軽く体重をかけていたイリだったが、諦めたのか安心したのか、ともかく

礼と共にクロスに体重を預けた。
（失神したか）
その方が少女にとって幸せだろう、と思いつつもクロスは走る速度を上げる。
もう、ここはデビュという平和な村では無いのだから。
地面は無数の足跡を刻み、風はおびただしいほどの血の臭いを運んでくる。
襲撃者達が奏でる無数の断末魔が木霊し、恐怖と狂気に満ちた気配が跋扈する。
安全地帯など、とっくに無い。
ここは正真正銘ありふれた地獄だ。
「グルオォォォォォォォ!!!」
クロスの死角から現れた、人の矮小さを嘲笑う存在が雄叫びを上げるまでは。

ここはもうありふれた地獄などでは無い。
今から始まるのは敵も味方も関係無し。
誰が生き残るかだけの秩序無き生存競争。
地獄ですらない。
血を流して咆哮しろ。
それさえ出来ぬ様な者では生き残れない。
ただ…地に伏して死を待つのみ。

第十三話　少女と逆行

「グルオォォォォォォォ!!!」
唐突に死角、しかも【安全地帯】の中から飛び出した影に足が止まった。
（しまった!!!）
モンスターなど入れるはずも無い!!
そんな無駄な常識が邪魔をして、反応が致命的に遅れた。
今からでは回避は間に合わない。
ならば、とるべき行動は決まっている。
行動を決めた瞬間、腕の鋭い一撃は少女を庇った少年の胸に深く傷を付けた。
溢れだす絶叫は気力で殺した。だからと言って生命まで殺さなくてもいいんだけどな、と縁起でもない思考に唾を飛ばす。
当然の如く武器は遠方に転がり、この状況でもう一度掴むのは絶望的だろう。
だが、ここで死ぬのは許せない。
その思いを胸に、少年は全身を血に染めながらも嘲笑う。
「…その程度…かよ」

その声は、秒読みで死に向かっている少年の放つ強さではなかった。
踏みしめる地面は赤く染まり、嘲笑う顔は既に蒼白。
それでも尚、少年はどうしようもなく生きていた。

先程の衝撃で、地に転がった少女は目覚めた。
瞬間、視界に入るのは紅。
最初は自分の血かと思った。
だが、直ぐに理解させられた。

「よう…化け物。あまり嘗めてると…喰っちまうぞ？」
血を、現実味が無さすぎて笑えるくらいに流している少年がイリを守っていた。
痛み、恐怖、絶念。全て味わっているはずなのに、全くそれを感じさせない。
それが…不気味に感じる。
「ク、クロスさんッ!!」
これは人の状態に疎いイリでも分かる。
明らかに、立っていられる…いや、立っていい状態ではない。
今だけは、何もかもを恐れずに少年を止めなくてはいけない。
そんな、チリチリと焼ける様な焦燥感に後押しされるように声を上げた。
だが、それで止まるようならそもそも無理をして立っているはずも無い。
「黙ってろ」
短い静止の声。
たったそれだけの行為で、クロスの命がどれだけ削れたのかはイリには想像も付かない。
分からないから余計に怖い。
クロスから流れる血が止まってればこの恐怖から逃れられるのに、一向に止まってくれないのが憎らしい。

イリが手をこまねいてる間にも世界は時は刻む。
モンスターは己が体を捻り、渾身の力を込めた一撃を瀕死のクロスに見舞う。
明らかなオーバーキル。
死の旋風が無手の少年に迫る。
少年がとった手段は【迎撃】
閃光のように煌く腕が、硬質の音を立てて一撃を退ける。
「うそっ!?」
痛みに呻くのはモンスター。
死の一撃を真っ向から跳ね返した少年は、傷一つない。
次いで腕を振るうのは少年。
風を切り裂き轟音を上げる腕が、圧倒的な実力差を外敵に見せ付けながら迫る。
回避も迎撃も間に合わない速度。
その一撃は容易く体を貫く。
先程までの絶望感が嘘のよう。モンスターは断末魔さえ上げずに死体となる。
だが…その代償は重かった。
「あ――ぐ、が…がぎがぎがっぎぎぎぎ!!」
突如、クロスは額を両手で締め付けながら奇声を上げる。

万力のような力で皮膚は歪み、頭蓋骨がきしきしと鳴る。
その尋常ならざる様子に、一時自身の足の状態すら忘れて飛び掛るようにクロスに駆け寄った。
「クロスさん！クロスさん!!」
だけど、イリに出来るのは叫ぶ事だけ。
苦悶の表情で、叫ぶ度に血を撒き散らして死に向かうクロスを観察する事だけ。
戦えもせず、癒せもしない。
イリはそんな自分がたまらなく嫌になる。
本来なら、受ける必要の無い傷。
それら全てはイリと関わったことでできたもの。
つまり…それは…
イリが付けたものではないだろうか？
ぬめり、と指先に絡みつく生命の温もりを孕んだ鮮血。
それは…誰の？
自分の？モンスターの？クロスの？
全て混ざり合って幻の様に溶けていく。
つまり、これは、夢だ。

怖い怖い悪夢。今すぐ目覚めれば消えてなくなる恐怖。
さぁ、目を閉じて…そして見開けば、全てが正常に――――

戻った

全て戻ったのだ。
血は相変わらず赤いし、少年は狂ったように絶叫する。
これが現実。変わりようの無い事実。
「あは…あはは」
どうしようもない現実から目を背けてケラケラ嗤う。
こうしていればナニモコワクナイ。
だけど…それで本当にいいのか？
自分を助けてくれた少年はどうなるのか？
一瞬で狂わしていた思考を停止させる。
動かすのはハッピーエンドへの思考のみ。
泣き叫ぶことも、狂い嗤うことも許さない。
今こそ、他人の生存を確定させる為の第一歩を踏み出せ。
私は試されているのだから。
残された時間は後少し。
後少しを逃せば少年は死に、私の存在も死ぬだろう。
さぁ、誕生から現在に至るまで、全ての記憶を網羅しろ。
その中から見つけ出せ。私が存在している意義を。

さぁ、まわせ回せ廻せ。
数秒の過去を見た。
数分の過去を見た。
数時間、数日、数ヶ月…数年の過去を見た。
そのたびに起死回生の一手を探す。
けれども見つからず次へ、次へと昔から今へと手を伸ばす。
焦りだけが積もっていく。
見つからない見つからない見つからない。
どれだけ遡っても、どれだけ近づいても見当たらない。
あるいは――、
　そんな都合のいいものなんて、無かったのかもしれない。
そう諦めかけたイリの記憶にするり、と有る出来事が滑り込んできた。

《それは、二対の【影】だった》
《コレ…何だと思う？》
《魔法…ですか？》
《そう、魔法だ。もっと具体的に言えるか？》

《確か…私達の体内にある魔力の性質に応じて、世界中に蜘蛛の巣状に張り巡らされている霊脈に宿っている、様々な現象を発生させる事の総称…》

あった。
あったあったあったあったッ!!!

だが、イリは自分の魔力の性質はおろか、魔法の扱い方も知らない。
それでいい。
性質も、扱い方も全部自分で構築してしまえばいいのだから。
例え、自身の臓物を切り裂かなければ実行できないと言うのなら、躊躇無く切り裂いて実行しよう。
ココに恐怖は無くなった。
あるのは使命感。他者を救う、という立派な名分。
「救済を掲げる」
トリガーを引いた瞬間、大気が震え、少女の意識は飛んだ。
「我が命は世界の為に」
理性ではなく、本能に任せ言霊を紡ぐ。

「我は汝に身を捧げる」
完璧な無風状態の中、少女の髪だけが世界にたゆたう。
「ならばッ!!此処にひと時の癒しをッ!!」
自身の魔力と霊脈を接続し、全ての魔力を注ぎ込む。
魔ノ法は此処に実を結んだ。
少女の願いどおりに、事象を改竄し都合の良い【今】を弾き出す。

「…あ?俺は、何を……?」

心身ともに無傷な少年は呟く。
今がどんな時なのかも忘れ、ただ事態の把握に努める。
自身の体には傷一つ無い。
だが傷があったはずの胸と、【呪い】を行使した腕の部分の服の生地が破けている。
頭を抑える。
先程までの痛みは鳴りを潜め、不気味なほどの沈黙を保っている。
その二点を把握したクロスは、この状況を作り出したであろうイリの姿を認める。
自分の傍で無垢な顔で眠りこけている。
触れてみると、その端正な顔立ちが濡れそぼっている事が分かった。
一体、少女は死にそうになったクロス(俺)をどんな気持ちで見ていたのか――
風に乗って届いた、つんざくような悲鳴が意識を現実に戻す。
顔を上げると、感覚的には遠い場所にモンスターが大勢いる事が見て取れた。
だが…実際には近い場所だろう。
モンスターに気付かれていない今のうちに、イリを連れて本来の目的地に向かおう。
そう思考を纏めると、クロスはこの状況に相応しくない寝顔を晒しているイリを抱え、全てを喰らうような自然の暗闇に姿を消していった。